

第三章

人間の働く職場めざして

——不況・合理化下で変りはじめる職場

I 不況・大合理化の激流のなかで

1 またも徹底したしわよせ——不況対策

われわれ日本人にとって、現在進行しつつある不況物価高の状況はまことに厳しく、戦後三十年の間に、かつて体験したことのない、深く広い危機を生活の中で実感している。高度成長と呼ばれた時期に苦勞してつかんだ賃上げや生活改善の実績は、ここ一、二年で完全にふっとび、残されたのは、首切り合理化と将来への不安、そして、残業をあてにして建てた長期住宅ローンの借金。

造船産業と造船労働者にたいして、とりわけ厳しい状況が押し寄せつつあることはたしかである。

現在、世界の船の建造能力は三千六百万総トンといわれ、日本はその半分以上の一千九百万総トンの能力をもっているが、石油危機以来、石油をはじめ海上運送の量が激減したことによって、船の過剰現象が一挙に表面化してきた。その結果、新造船の注文も急減し、キャンセルも続出し、五〇年の日本の受注実績は八百五十万総トンとなり、能力の半分以下の実績におちこんでしまった。しかも、五年後には、世界全体の船の需要見通しが一千万—一千二百万総トン程度に

なるだろうと予測されているから、日本の建造能力だけで、世界の船をつくれる関係にあるということになるのだ。

日本の造船資本家たちが、能力をフルに發揮して、安くていい船をつくることによって、三菱香焼工場百万トンドックに代表される超近代的造船体制を生かしきろうとするのは当然の方向である。だが、このような超能力的な船の造り方は、徹底的に労働者を安く、能率的につかいないし、搾取する以外には不可能である。だから、今、三菱は、日本造船業界の先頭にたつて、その道をきり開こうと必死になっているのだ。

では、三菱は、今、造船現場で、どんなふうに船のつくり方をかえ、労働者の使い方をかえようとしているのか。三菱の作業長たち職制の必読文献である「かんとくしゃ」七六・三・一号にはつぎのように書いている。

「造船業界は、回復基調の日本経済とは裏腹に、まさに構造的な不況へ突入しており、しかもその不況の長期化が予想されています。

私たちはこのような不況を冷静にみつめるとともに、この不況の中で少しでも競争力をつけ、生き残るため懸命なる努力をつづけていく必要があります」

この考え方にたつて、つぎの二つの、不況対策の具体化をすすめている。

三菱の会社ニュースである長船ニュースによれば、一つは、どんな仕事でも確保するために、

①中小型船の建造体制の確立、②船以外の分野、例えば海洋構造物や橋梁などの分野に積極的に進出すること。

もう一つは、「当所の体質を何でもやれるよう低操業に見合った体質作りを急ぐ」として、①新入社員の採用中止、出向、配転、定時退職、自然減の不補充など、完全な首切り以外は何んでもやり、②電力、水その他の副資材の節約を徹底的にやること。

こうして、三菱は世界の市場を制するために「いかに安全に、いかに高品質のものをいかに安く作るかがわれわれの課題」であるとして、全三菱労働者の会社方針にたいする協力を呼びかけ、徹底的な人べらしと小人数での生産性向上をおしすすめているのだ。

2 時間に追いまくられ変った職場

このような三菱の方針によって、造船現場の状態はどんなふうに変わってきたのか？

私は、何度か、立神の丘にたつて、造船現場を見下した。この丘から見ると、船殻ブロックの組立場、二つの造船ドック、巨大な六百トンゴライアスクリンをはじめ、さまざまなクレイン群、そして進水して艀装中の外国タンカーなど、造船所の心臓部を一望に見下すことができるのだ。朝の始業時は八時だが、二十分前にはほとんどの労働者が門をくぐり、あたふたと控所の建物の中に消え、作業服に着換えて、組立場やドック周辺の空地で、体操をはじめのがみえる。昔は八時までに入門だったのが、今は、着換えて、体操をやるところに八時ということになったから、どうしても十五分前には門に入らなければならなくなってしまったのだ。帰りも、昔は四時終業で、三時半には汚れおとしの風呂に入ればよかったのに、今は、五時終業で五時から、風

呂に入る。昼休みの仕事あがり、仕事始めも、同じように合計二十分は長く働かされるようになったから、一日で一時間以上、労働時間がのびたことになる。これが五日間つづくと、一日分の労働量は完全にひねり出せることになる。これが、実は、昭和四十八年から、会社が始めた週五日労働、二日休み制度のかわりにとられた労働強化の中身なのだ。なんのことはない、一日分は完全に後の五日でカバーしているという三菱式時間短縮の実態がここにある。

昼休み、丘の下にある、分会の立神地区事務所において、三菱製の弁当をご馳走になりながら、職場の様子をきいた。

「とにかく、きつかですよ。なにもかも時間で追われてやらなければならないですよ。昔なら、一つの作業班に溶接工も鉄工もグラインダーもみんないて、工程も一週間単位でやっとなつたのですが、今は、ブロックのつけ合わせ、何時間で○○の仕事、これは▽▽の仕事というふうに、一隻の船を作る総時間数一万余千時間からわりだして、すべて時間単位で、仕事が決められるわけです。それで、七時間と決められた仕事を時間内にできん時は、その理由を書いて報告せんばならんわけです」

つまり、中小型船一隻一隻の船を造る時間を決め、その時間内であげるように総力体制をひき、他の船を作っている係と競争をするのだ。どちらが早く、どちらがいい仕事をしたか、係同志が競争して必死に働くのを、課長がみているから、優秀はすぐわかり、係長、作業長の能力がとわれる。そこで、係長は有能な作業班を選ぶようになり、作業長は有能な労働者を使って、成績をあげようとする。すべてが、自分の能力評価につながり、出世につながる。

「労働者は人より長く働いて、よか仕事をして認められれば、出向や配転でとばされると思つて、戦々きょうきょうととつとつです。休暇もとれんようになるし、作業長は前の日の十時までに届け出れば、休暇はとらせんというわけですたい」

「労働の班管理から個人管理へ、そして、個人報告制へ」と、労働者の意識は四六時中、自分の仕事の責任を果たすことで頭が一杯になり、いらいら、くよくよ、いつでも、肉体的精神的に疲労の連続という毎日がつづくのだ。

だが、三菱はあくまで、個人管理の方向をとことんまで追求する方針であり、そのために、六ヶ月もかけて、この体制に切りかえるための準備をやったのだ。だから、職制もまた、益も正月も返上して、わが家で、仕事をつづけることになる。

そして、結局、労働者は、いつでも作業長に監視されながら、ロクに便所にもいけず、煙草も吸えない状態で働きつづける毎日を送る。監視の中で、やたらと守るべき規則がつくられ、大の男たちが「しつけ教育」においまくられる。

「煙草は喫煙場所で吸え」

「十時と三時以外は一服するな」

「安全項目を暗誦すること」

「名札が曲つてついとる」

「あれよし、これよし、すべて、指でさしていうこと（指差呼称）」

これを、作業長と労働者がむかいあってやる恰好がなんとも珍妙で、労働者に評判が悪い。む

かいあって、お互いに、安全帽や作業靴を指さし、「あごひも良し!」「靴良し!」と叫びあうわけだ。さらに、別の職場では、

「個人目標を、帽子にはって働かせよ」

「現場に行くまでも、ポケットに手を入れて歩くな」

これをいった作業長のいいぶんは「みた目が悪いから」

「五分前に手を洗うのは早い」これをいった作業長のいいぶんは「他の班の班長からいわれたから」

こうして、それぞれの作業班が監視し合い、密告しあって、一分一秒でも働かせる習慣をつくる競争をする。この習慣がつくられると、たとえば、現場労働者が手を洗って、食堂に行つて食べ始めるのは、だいたい十二時十分過ぎくらいになってしまふから、それに合わせて、事務部門の労働者も十二時十分過ぎてから箸をとれというしつけがされるようになってしまふのだ。

三菱の要求する、労働者の時間管理、労働の自主管理はムダをはぶくという目的のために、とどまるところを知らないほど、人間一人ひとりが自由に行動し、生きる範囲を縮少してしまふ。かくて、労働者は家にたどりつくと、クタクタに疲れきって、テレビをみて、九時には眠つてしまふ以外、なにもできない日々の繰り返しとなつてしまふのだ。

3 ますます強まる監視と “踏み絵”

会社にいる間中、時間管理による監視労働に追いまくられ、息つく暇もなく、会社の門を出ても、私生活管理、思想管理の会社と重工労組の眼が光る。機械工場の重工労組に所属する若者が、ある時、分会員に悩みを打ち明けた。

「この前、若い者が集まって話をした。いろいろ、不平不満が出ると思ったら、全然出ん。ふだん、一対一で話しとるようなことも話さん。気がついてみたら、おいも腹の中にあることを話したらんとですよ。つまり、お互いを信用したらんわけですたい。あいつがああ作業長に報告するやろう、こいつが組合の委員にいうやろうて、考えたら、ノドから出かかった言葉もひっこんでしまおうとです。

集まったら、会社と重工労組の悪口をいうとは、タブーになるわけですたい。話すことといえど、ギャンブルかセックスの話、それも、最近は勢いよく話さんですよ。あたりさわりのなか、家庭の噂とか……ばってん、そげん、つまらん集まりでも、すっぱかすわけにいかんとです。集まりに顔を出さんば、チェックされるわけです。なにしとった？ どこへいった？ 分会の人とつきあっとったろう？ といやらしくやられるわけですたい」

分会の人たちが、重工労組の若者たちと話し合うことさえ、大変な苦勞が必要であり、つきあいを継続させることは至難の事業というわけだ。なにしろ、ここ数年は、重工労組だけが組合と

思い、分会の存在も知らないで入ってきて、教育の中で分会員は恐しい人間だといわれるのをそのまま信じこんでいる若者が増えてきているのだから。

まず、分会員とは、会社のいっているように生産を妨害したり、不自由や統制の好きなゴリゴリ人間たちでなく、もっとも自由に生き、人間らしく生きている人間たちだという姿を肌で感じてもらうための努力が大変なのだ。会社の監視の眼を盗んで、ふざけあったり、マンガ本をまわしあったり、歌ったり、スポーツをしたり、そして、会社の外でも、たまには、コーヒーのんだり、一杯のんだり、ごく普通の人間らしいつきあいをするのに、ひどく苦勞をする。

つまり、眼を盗まなければならぬのは、つきあう若者たちの気持と立場を配慮してのことであって、分会員が職制に見つかることを恐れているわけではないのだ。だがこの苦勞の末に生まれる友情はこの上もなく嬉しい。

「冗談もいえず、歌もうたわず、しょっ中、緊張ばかりしするのは、がまんできんし、健康に悪かです。ちょっと一服する、ちょっと立ち話する、ちょっとじゃれ合う、一節うたう、みんな働いとる人間は、それで緊張をほぐして、つぎの仕事にそなえておるとです」

幸町工場の分会員、小川さんと田川さんが同じようなことをいった。

ピラや職場ニュースを通じて、重工労組の人たちに、語りかけていくことも、重要な人間交流の場であり、その時々の問題を訴えかける場であり、職場の労働者の権利と自由を守り育てる大切な機会なのだ。

「お早うございます。ご苦勞さんです」

第三章 人間の働く職場めざして

ほうでもビラをうけとり、さっとポケットに入れていく人もあるし千円をパッと渡して行ってしまふ人もいる。災害で亡くなった下請労働者のためにカンパを訴える時に、黙って頭を下げて、大枚をカンパしてくれる下請業者の人もいる。

だが、大勢の重工労組の人たちにとっては、ビラにたいしてどういう態度をとるかが、忠誠心の見せどころということになるわけで、毎朝毎晩、自分の本心とはかわりなく、あるポーズを



事故をなくし人間の働く職場に

分会員がさしたすビラにそっぽを向いて行く人、大仰に手を振る人、一瞬、眼で挨拶をして行く人、とらない人の表情もさまざまである。門の近くで、上司や勤労の眼がある時は、さらにその反応は硬くなる。もちろん、ぶっきら

とって、ピラの前を通過しなければならぬのだ。まさに、一瞬一瞬が、監視されながらの「踏み絵」の時の連続ということ。

4 人間をおしころす職場を変えよう

——ピラ・職場ニュース・ハンドマイク宣伝

ピラよりは、各職場分会員の出している、職場ニュースの方が、読まれる確率は高い。自分たちの身近におきた問題をとらえ、会社側の動きや、分会員の考え方やたかいたかいを、その都度伝えていくわけで、いわば実のある職場ニュースを心待ちし、期待してくれている重工労組員が少なくないことも事実なのだ。このニュースを週刊なり三日刊でつくって職場の人たちの手にとどけるまでが、これまた大変な苦勞である。

帰りに、門のところまで渡せる職場もあり、昼休みに、食堂で渡す職場もある。重工労組は当然、分会のニュースは受けとるな、読むなという指導をし、船穀内業の職場では、分会員が手渡すと、三メートル後に重工労組の委員たちがクズ籠をおいて立っていて、そこへ捨てさせることまでやった。

「なんの権利があつて、そげん邪魔をすつとか！」

当然、激しく抗議し、やりとりになる。だが、労働者は耳もとで、喧嘩されるのを嫌う。分会員は、また、食堂のテーブルの上、一人ひとりの労働者の目の前におくようにした。目の前にお

第三章 人間の働く職場めざして

かれれば、自然にニュースに眼がいき、読むようになる。手を使わずに、眼だけで事が足りるのだ。分会員は、その要求にこたえるために、ニュースを片面に印刷するようにした。つまり、手を使ってひっくり返さなくても、全部読めるようになっていたわけだ。

重工労組の役員は、これをやめさせようと、大きな換気装置をまわして、紙をとばす戦術を考えた。分会員は、すぐ、風が吹いても紙が飛ばないように、お茶をテーブルにちよつとずつたらし、その上に、ニュースをはりつけていくことを実行した。

まことに、涙ぐましい努力である。

ただ、一枚のニュースを読んでもらうために、これだけの妨害とたたかうことを、毎日繰り返さなければならぬ。もちろん、重工労組としても対抗して、職場ニュースをつくり、職場闘争を挑み、分会員の教育宣伝が、重工労組の若者に伝わらないように、キメのこまかいたたかいを仕掛けてくる。

ハンドマイクによる、口頭放送も、こうした日々の苦勞から生まれた、新しい宣伝交流の武器である。毎日昼休みに、担当の分会員が、その日のニュースや訴えを、全労働者に口頭で伝えるのである。

私も、何度かその状況をみる事ができた。労働者は黙々と箸を動かしながら、分会員の語りかけを聞いているのか、いないのか、無表情な外見からはわからない。訴えがあっても、拍手がわくわけでもなく、反応は全くない。これは、重工労組の訴えにたいしても同じである。だがニュースが視界に入れば読む以上に、声は間違いないと伝わっていることはたしかだ。私が、その日

の帰りに、ある重工労組の若者から話を聞いたら、その日の分会の口頭放送の中身をさうとう、正確に覚えていたから。

この口頭放送が始まってから、職場ニュースやピラを、強制的にとりあげられることがなくなった。新聞をとりあげることが無意味になり、マイナスだというふうに、重工労組の幹部たちが考えるようになったのだ。つまり、苦勞してピラをとりあげても、その中身を放送で伝えられてしまうのだから。

口頭放送のたたかいかいによって、相手の暴力的ピラ封じ作戦をやめさせることができて、労働者の手元に、ニュースをとどけることが少し楽になった。

ある日の、外業ドックの食堂。

村里さんが、ハンドマイクを握って、この日のニュースを伝えていた。

「職場の皆さん！ 今日もお仕事大変ご苦勞様です。立神地区委員会の訴え、第五回目は、不況乗り切りをはかるため、会社側が進めている労務管理のあらたな変化について皆さんとともに考えてみたいと思います。

「残業がことわりにくい」「定時でありがりにくい」といって長時間労働にかりたてられていたのはつい一年前。「仕事がすくうなれば楽になっけん、よかやかね」といっていた人達が、今では全然楽になるどころか「かえってきつうなった」といっています。

職場の皆さん！ どうしてこうなってきたのでしょうか？ あらためて職場の実態を、労働の実態をじっくりみつけてみようではありませんか！

第三章 人間の働く職場めざして

師走をむかえ、ただでさえあわただしいところへ、今、年末無災害特別月間と称して、安全管理がやかましくいわれています」

この日の訴えは、分裂攻撃を受けて十年たつのを機会に、あらためて分会の考えを語り、みんなと一緒に考えるシリーズの五日目にあたるものだった。村里さんの穏やかな語りかけが、一言一言、しみ渡るように伝わっていく。

「現場はやたらとヘルメットの青線と腕章が目につきます。一方、しつくと称して、服装名札とやかましくいわれ、管理者はタバコの吸いがらや、棒クズを熱心にひろっています。こうした中で、組溶課の青年は観察パトロールで一人一時間をかけて観察され、『一挙一動をジッとみられて、気もポーンとなった』と話しています。仕事ぶりもチェックされているだろうし、タバコもおちおち吸えん、作業場が離れにくい、こうした声はどこでも聞かれます。たしかに、こうしたとりくみは、不安全な場所や行動を摘発するには一定の効果はあげているでしょう。参加している人たちも一生懸命とりにくんでいることはみんなも知るところです。しかし、一日中、気の休まらない状況、作業場を離れない状況が作り出される中で、本当に災害がなくなるのでしょうか！

全所的に、職場ぐるみで進められているこうした事態から生み出されるものは、一層の労働強化とサクサクとした人間関係、ゆとりのない精神状態。それは、ひいては災害を招き、健康破壊を一層、押し進める要因となるのではないのでしょうか。職場のみなさん！ ケガも災害もない、明るく働きやすい職場、それはみんなの願いです。職場の皆さん！ 今私たちの職場は、怒られ

んごとせる”とか“言うて損するよりは、バカの真似してだまっとったがまし”という空気が支配的です。

一日の大半を過す職場が、人生の大半を送る職場生活が、人間性をおし殺し、いいたいこともいえずに過ごさねばならないことほど人間として不幸なことはないと私たちは思うのであります。

この十年間、私たち分会組合員は会社の差別、いやがらせに歯を食いしばって耐えてきました。そして、今なお三百数十名が、人間らしく働ける職場をめざしてがんばっています。私たちは同じ職場で同じ働く仲間としてこの三百数十の団結の輪を千人、五千人、一万人と、さらに大きく広げたいと願っています。この団結の輪こそ、会社がもっとも恐れるものなのです。重工労組の仲間の皆さん！ともに手をとりあいましょう！」

5 沈滞を破るキツカケ——労災事故・差別事件での勝利

不況による合理化が進められる中で、会社の一方的な出向、配転に不満をもつ人びとの声を耳にする。ある若者は、関西の関連企業に出向になったけれど、行くのがイヤで、五日間も沈黙の抵抗をし、とうとう、課長、じきじきに頭を下げ、時間中に本人をひっぱって家までいき、親に頼んだということも耳にした。

不満はあっても、表に出ず、そのまま、首になるよりほということで行ってしまうケースが多

第三章 人間の働く職場めざして

いのだ。重工労組は、会社の不況対策に協力する立場だから、一応、形だけは「出向先の受け入れ条件などを慎重に調査した上で」などと、組合ニュース「だんらん」に書くだけで、一向に労働者の立場にたつて、会社に文句をいうなどということはしない。

分会員の中では、この困難な時期にこそ十年の差別攻撃をはね返し、あわせて、労働者を情容赦なく整理する合理化攻撃を職場でうけとめ、反撃するたたかいをとという声が高まり、職場におけるたたかいが新たに起こってきている。

犬塚事件で、災害を起こさせる元凶が会社であることを天下に明らかにし、岡田さんたち分会復帰者にたいする差別事件で、不当労働行為だから差別をやめ、謝罪することを会社に義務づけさせた二つの権利闘争の勝利が、今まで職場にあった、「たたかってもムダだ」という沈滞した空気を、打ち破るきっかけをつくったのだ。

分会の労働組合としての存在を無視し、団体交渉に応じようとしない三菱にたいして、ねばり強い職場闘争が、各職場で行なわれているが、たとえば、幸町工場における、本多正男さんの配転を拒否した、たたかいは、そうした職場闘争の高まりの大きな成果といえることができる。

本多さんは近松さんと同じ工場であり、ちょうど、近松さんたち三十名の分会員が人権差別を法務局に申立てる準備をしている最中に、今まで所属していた工程推進職から、同じ工場内で四尺旋盤を使う機械職に配転されるということが起こった。明らかに、分会員でなければやらない不当配転だった。

かつて、いくらか旋盤を使った経験があったといえ、十数年間、作業の進捗状況をチェックする工程推進の仕事をしてきた人間に、四十歳半ば近くになって、機械工として働かせるということは、懲罰人事、差別人事そのものであることは、誰の目にも明らかだった。どうしても、納得がいかないし、仕方がないときらめるわけにはいかない配転だった。

和田地区長をはじめ、職場の仲間みんなで話しあって、本多さん一人のことでなく、分会員全体、労働者全体のこととしてとらえ、みんな、労働委員会に訴えてもたたかおうということを決めた。

本多さんも最初は悩んだ。労働委員会に訴えて、公然とたたかうことになれば、また、新たな困難や差別が重なることも考えられるし、果たして、不当とはいえ、同じ職場での配転をはね返す力が、自分たちにあるのかどうか、なにかも不安だった。大塚さんが法廷の様子にとまどったように、本多さんもまた、会社側の弁護士や職場の上司を相手に、どこまで、たたかい抜けるのか自信もなかった。だが、仲間たちの結束はかたかった。

「われわれ自身が弁護士になり、みんなの手で、職場での差別の実態を明らかにし、証拠をみつければ、労働委員会で、会社と対決することを決めたとです」

和田地区長が陣頭指揮をし、碓さんが労働委員会対策の責任者となり、幸町工場五十人の分会員が、一丸となって、たたかいをすすめることになった。

幸町工場では、これまでも、一人ひとりの上司の差別行為を見逃がさず、相手の発言をとらえ、メモし、追及するというたたかいを根気よくつづけてきた。二年前にはある作業長が和田さ

んをふくめて三人の分会員が「時間中にメシを食っていた」というウソの報告をした事実をとらえ、「ウソ報告事件」として、ねばり強く、会社側の管理体制のいい加減さと、差別密告政策を追及した。

この時「和田さんたち三人は、葬式に出席するために、私用外出をするべく、食堂を通った」というのが真相なのに、作業長は、三人がメシを食っていたとA係長に報告し、A係長は三人の上司であるB係長に報告し、B係長が食堂に見にきたということになったのだ。

この時の和田地区長と担当の林課長のやりとりはつぎのようだった。

課長「間違いがあったようだということで、私が、謝れというなら謝ってもいいといたただろう」

和田「間違いではない。ウソの伝言だ。ウソの伝言を私たちが聞いて、事実がはっきりしたのだ、こういう問題になったのだ。もしも、これを知らずにいけば、めしを喰ったということが残っていく。だから、事実をはっきりしようというのだ」

課長「それらしいという、作業長の報告で、職制として、一課に報告した」

和田「その、らしいという、事実でもないことを、なぜ、信用するのか、そこに分会組合員にたいする偏見がある」

このように、一つの事実をとらえ、不当な差別を許さない職場でのたたかいの魂が、本多事件を、許すことのできない行為として、三菱の不法不当なやり方と、正面からたたかう行動に発展していったのだ。

Ⅱ 三菱の底辺を支えた果てに

——まず下請けを叩っ切れ

1 十五年勤めて退職金五万円・全員解雇

Iさん夫妻は、十数年間、三菱で造る船の清掃の仕事をつづけて、昨年、首になった。不況合理化が、まず下請け関連企業を襲う中で、夫婦一組に情容致なく首切られてはおりだされた。六十になる二人にとって、子どもたちを育てあげたのが、せめてものなぐさめではあるが、まだ、それぞれに子育てと生活設計に忙しい子どもたちの厄介になるわけにはいかない。立神の丘の上にある二間の小さな家で、六十代七十代の残された人生を、二人で生きぬかなければならない。

清掃の仕事では、奥さんがIさんより先輩であり、腕もよかった。船の清掃者にとって腕がいいということは、地上三十米の高所でのいち綱を身体にまきつけてする仕事から、船底の暗がりには湯気をたてている糞尿を処理する仕事まで、危険で、汚い仕事に熟達することなのだ。新造船が出来ていくのにあわせて、つきつきにはきだされる鉄片や溶接クズなどのあらゆるゴミを掃き集めて、ドラム缶に入れ、船外に運び出す仕事なのだが、中には、三十米上の甲板までもたないで、労働者が排出した汚物も混っているという次第。

「初めて出勤した日から、高かところに連れていかれて、仕事させられたとです。ふきさらし

第三章 人間の働く職場めざして

で、手はかじかんで、下をみると足が震えるのです。今は足場板の上で仕事できっとですが、そのころは、足場板のない所へしがみついて、手をのばして、仕事をさすのです。ちょっとすべったら、一卷の終わりです。女も男と同じ仕事をさせられたのです。イヤ、女の方が度胸がよかし、強かったとすけん、清掃では女大将です。うちの父ちゃんも、おとなしかし、いつもは地上の仕事だったとすが、手が足りん時は、船に手伝いにきよったとす。そげん時は、やっぱり父ちゃんをかばいよったとす。船底のやりやすか仕事を父ちゃんにまわして……そんだけやっても、女は男より日当が七百円安かったとす」

十五年間、働きつづけて、＼船の掃除なら、世界一＼という誇りが、清掃に半生をかけた婦人たちの心の芯棒になっていた。船の隅々までを知りつくし、心をこめて掃き浄める仕事にすべてをかけていた。

突然訪れた全員解雇の時。なんとか頑張りたいと話し合いもしたし、分会員も力になってくれたけれど、結局ダメになってしまった。男の棒心（仕事上の先輩、リーダー格の人をさす名称。後輩を先手さきでという）が、一人だけ残ろうとしたけれど、それもダメになった。

退職金は四万円、ボーナスは支給日までにないということ、一律一万五千円、すべて合わせて五万五千円が渡された。夫のIさんは、退職金が一万円高く、五万円だった。

Iさんはもと郵便局勤め、I夫人は電話局、やめてから十五年間を、この三菱の下請け会社に勤めて、退職金が、二人あわせて九万円——これが、世界一の造船大企業「三菱」の下請けの現実である。

「ほんとに、みじめなもんです。馬車馬のごと働かされてきて、やめる時は血も涙もなかですもんねえ。父は四十五年、三菱で挽鉄工で働いて、兄も三菱の工業学校専修科を出て、ずっと三菱で働いてきたとです。うちの娘の頃は、飽の浦はドロコで狭い道で、三菱の門の前に大きな池があって鯉が泳いどったとです。あのころはまだよかったとです」

2 事故で死ぬのめたいが下請けです

数少ない分会員の副作業長、柴田さんの奥さんも、去年暮、勤めていた、三菱の下請け会社を首になった。船内の電気機装の仕事だった。やはり九年半勤めたけれど、四万ほどの一時金をもらって終わりだった。退職金制度は全くなく、労働基準法に決められている、一月分の予告手当もくれない、突然の首切りだった。

「あんまりひどかと思つて、一緒にやめさせられた人と話して、私もいうたんですが、どうもありませんでした」

柴田家でも、柴田さんがもうすぐ退職するから、奥さんが働かなければやっていけないのである。

今回の不況になってから、長崎三菱関連の企業で首切られた下請け労働者の数は四千といわれる。はっきりした数字はつかみにくい、五千をこえているともいわれている。三菱以外に、大きな事業所のない長崎の街で、五千人の失業者がでることは大変なことである。下請け企業の解

第三章 人間の働く職場めざして

散、首切りに、本工の「残業ゼロ」の状況が加わって、長崎の街には、不況の嵐が吹きまくり、キャパレーやバーは倒産した。労働者はみんな耐乏生活をつづけ、やっと手に入れた、住宅を手離した。

この頃では、労働者同志の挨拶が「お早う」ではなく「まだ、おったねえ」「よかったねえ」に変わったという。

私はこの状況の中での、下請け企業の様子をきこうと思って、溶接工のVさんを訪ねたら、もう、会社そのものがつぶれて、全員解雇になった後だった。この会社は溶接や鉄工関係の業種が中心で、給料待遇も比較的ましな、堅実な会社だったが、去年、給料がダウンしたのが前触れで、修繕の仕事が全く入らなくなって、倒産してしまったのだ。

「いろいろ話しあいも相談もしたとです。関連企業の協力会もなんにもしてくれんし、重工労組も、相談にもものってくれんとですよ」

Vさんは狭い玄関先で、子どもたちを叱りつける奥さんの方を気にしながら、沈んだ声で、今の気持を話してくれた。

「ほんのこと、重工労組はなんもしてくれんかったです。関連企業協力は三菱で働く下請けのものが協力し合うちゅうことだったとやが、向こうからきたとは、選挙の時だけでした。小宮選挙をすっかりやらんば、仕事がなくなるていわれて、オヤジ（社長）先頭に、票読みやらされたもんですたい。それが、いよいよクビてなったら、鼻もひっかけんちゅうわけですたい」

Vさんは、電気溶接のベテランで、十二年間、この会社に勤めて、もらった退職金は十五万円

である。これが、下請けの中ではまだといわれる待遇の中身である。

「下請けの仕事は割にあわんもんねえ。本工より、きつか仕事やらされて、事故で死ぬのもたいがい、下請けやけんねえ」

作業条件から詰所から風呂から一切合財、差をつけられて、僅かに、弁当だけは本工よりよかつたけれど、これは、自前で払っていたのだから当り前のことと、Vさんはつぶやいた。

別れ際に、もし、また、条件がかわって、三菱に勤められるようになったら行きますかと質問したら、

「もう、三菱はあきた、もういかん」

という答えが返ってきた。社長だけは、まだ名義だけを三菱に残して、再開の時を待っているという。

3 首はつながついていても……まともに働いて五十男で八万円

首を切られずに残った人たちの暮しも苦しい。Jさんは、十一年の経験をもつ取付工で、一人首になって、今年の春からまた働きました。この会社は下請けとしては大手の一つで、溶接、鉄工、塗装、あらゆる職種の労働者がいて、一時二百人くらいに整理されたのが、最近四百人近くに増えている。九月あたりから仕事も急に増え、土曜は必ず出勤するし、土日つづけて休日出勤することもあるという。残業もあるしいい状態になったけれど、ただし、これがいつまでつづ

第三章 人間の働く職場めざして

くかは、全くわからないのだ。

「選挙で小宮と民社党に勝たせるまで、下請けに仕事まわしたという噂もあったやが……」

Jさんは心配そうに、将来の見通しの話になると口をつぐんだ。残業で稼いだら収入もいいでしょう、二十万くらいにもなりますかとときいたら、まあ、水あげはねといって、後を濁した。すぐ、流しのそばから奥さんの声がとんできた。

「とんでもななかですよ。手取り、十万から十二万ですもんね。子ども三人の五人家族ですけん、うちが働いて、やっとなです。スーパリーのパートで働いて、五万か六万。夫婦あわせて十六万くらいで、ほんとに苦しかですよ。ここの家賃が一万円ですけん」

古い長屋アパート、二間つづきで、日当りは悪いし、裏は崖。早く、公営アパートへでも入りたいが、見通しはない。

奥さんはズバリ、初対面の私に、生活の実態を数字をあげて説明してくれたが、Jさんは、すべて、景気がよくなりつつあるように話す。

「よくなるて、思いたかわけですたい。下請けの人間の気持は同じですたい。Vが、三菱はもうあきた」ていうのも見栄ですたい。ほんとは行きたくても、また、いつ捨てられるかわからん、せっかく、みつけた電気工見習の仕事を地道にやった方がまだよか、それがVのほんとに気持です」

同じ、下請工のRさんがこんな風に説明してくれた。この人の仕事は、溶接部分のレントゲン検査という特殊作業でクビの心配はなかったが、収入は八万円から九万円がいいところ。奥さんと子ども二人。やはり二間の間借り住居だが、家主の好意でわずか四千円の家賃ですんでいるお

蔭で、助かっているのだ。

「首になった人間はみじめなもんですたい。失業保険を六万くらいもらって、暮しとるですが、それももうすぐ終わりですたい。後の仕事のあては全然なかですよ。奥さんが働いて、五万円くらい稼ぐのがせい一杯ですけん」

首切られた人もみじめだが、まともに働いて五十男が八万円という、下請け賃金のなんとという安さ。本工でも、現場労働者の賃金は、三〇・四歳で十二万四、六三五円（五一年七月現在）という低さであり、三菱が、いかに、現場労働者を安く使っているか、想像以上の実態だった。とにかく、不況の風が吹き出してからは、首がつかっていけばよしという空気の中で、賃金の不平をいう人間も少いのが実情なのだ。

「造船の下請けは本名を使わんで働けたですけん、それでいろんな人間が集まってきたとです。＂アンコ＂とか、＂渡り鳥＂とかいわれて、初めは、ボーナスなんかなくて、タオル一本の挨拶でした」

かつて下請労働者は、労働基準法も安全衛生基準も関係なく酷使されつづけてきた。ハウスはいつもクサくて、冬寒く、夏はむし風呂のよう。今は風呂ができたけれど、ドックができる前は、下請労働者だけは、油と汗の身体を水で洗っていたこともあった。

「本工さんも忙しか時は態度やさしかったです、今はいばって、太か態度ですたい。分会の人は別です。職人気質で、上とはやりあっても、われわれには親切ですけん、みんなわかっとうです」

Rさんは分会の人に伝えてほしいと言って、最後につけたした。「分会の人たちは、私ら下請けの人間に、もっと、腹うちあけて、率直に、働きかけてほしかです。もっと、親しく話しかけてほしかです」

4 下請労働者は分会に期待する

下請労働者は分会のたたかう労働者が、どうするかをじっとみつめている。今、大きな生産縮少と生産体制の変化の中で、下請労働そのものを、極端に小さなものにしてしまおうという方向に動いているようにみえる。「なんとかして、三菱の一方的な都合だけで、情容赦なく首を切られないような道はないものなのか。不況といっても、三菱はびくともしないし、今までの大きな不況のたびに、三菱は大きくなって、日本一の大会社にのしあがったのだ。われわれだけが、この民主主義と福祉国家を目指す日本で、どうして、こうも、簡単に首切られ、いつでも、生命と生活の不安の中で暮していかなければならないのだろうか？ 長崎も江戸時代ではないはずだ。民主主義の国のはずだ。なんとかしなければダメだ、なんとか……」

ある、若い下請労働者がこんな風に手記に書いた。

下請労働者の人たちは今までも何度か、労働組合を作ろうとして、つぶされてきた。今度も、分会の人たちの力を借りて、やっと組織づくりに成功しかけた矢先に、重工労組小淵委員長の手で、三菱および経営者たちに、組合員名簿を売り渡され、集中砲火を浴びた。せっかく、拡がる

うとした出鼻をくじかれ、脅され、泣く泣く加入を取消した人もいる。

この時、首を切られた本多さんの理由は、「独身で、仕事もできて有能であるから」ということ。ほんとうは、彼が、下請合同労組の副委員長だったということなのだ。

本多さんは、たたかい抜く決意を固めた。彼の田舎は、群馬県前橋。遠く故郷を離れて、友人のいるこの長崎で、三菱下請けの不動建設に働いている時に、起こった首切り。年も若いし、家族もいない。だが、ここでもし、泣き寝入りすれば、下請労働者の組織は崩壊するし、やっと育ち始めた働く者の団結の芽が枯れてしまう。

彼は、長崎市内のあらゆる組合、組織の力を借りて、解雇撤回のたたかいを始めた。長崎地区労や県評、熊谷弁護士、市役所や電報局、そして、関連企業の労働者の組合づくりを成功させた長崎放送の労働者、その他、民間でたたかっている争議団など、すべての人たちの力を結集して、長崎争議団共闘会議が誕生した。

Ⅲ 二万円の差別うけても分会がいい

——復婚者のねがい

1 選挙がたまらん

七六年、重工労組から分会に、四人の人たちが帰ってきた。一人は二十代の若者、後の三人は

第三章 人間の働く職場めざして

元副班長を含めて三人の中高年労働者。＃造船産業そのものが、斜陽産業となり、基幹産業から脱落するのは……＃などと噂される状況の中で、＃労働者はこの危機の中でこそ、目覚めて立ちあがるだろう＃というふうを考える傾向もあるようだが、現実には、必ずしも直線的にはいかない。その大きな原因は、生産現場の主要勢力になりつつある若者たちがさっぱり動かないし、なにを考えているのかわからないというあたりに関係がありそうだ。

だが、若者をつかめないという悩みは、労働者の側の大きな問題であるだけでなく、三菱の経営者が最も頭を痛めていることでもあるのだ。まだ、これといった決め手をつかんだというような確信は、経営者の側にもないようだが、ただ、三菱の青年対策をみると、若者をちやほや甘やかすだけでなく、＃ひっぱたいて鍛えて、組織と集団へ＃という傾向が現れてきつつあるように思える。大がかりなスポーツ祭典、派手なフェスティバル、三菱王国のウィジョンを実現するための選挙闘争、そして、徹底した反共思想動員などなど、社内だけでなく、長崎の町と暮らしを大きく包みこむ、王国の建設に若者たちの生き甲斐を見つけさせようとしているようである。

だが、三菱という巨大な軍団が、地上最大の力をもつクレインに名付けられた聖書の巨人ゴライヤスのごとく、全軍をひきいて大地を占領しようとする時こそ、最も大きな時代の転換期となることはたしかなのだ。徒手空拳のダビデが一つの石で、ゴライヤスの肩間をうち割ったように、三菱帝国が蟻の穴の一つから、音をたてて崩れる日がくることは、歴史の必然といえるだろうし、問題は、三菱の黒い支配の肩間はどこか、アキレス腱はどこかということなのだ。

この厳しい不況と逆流の季節に、四人の人たちはいったい、なにを求めて、あえて、三菱と重

工労組の差別と迫害の中を、分会に復帰してきたのだろうか？

下浦直さんは五十一歳、修繕部の船渠課船渠係所属。元、漁船で無線士の仕事をしていて、三菱に入り、アメリカから払い下げの大砲を自衛艦につける仕事をして、さらに、いくつか職場がかわり、今の仕事をやるようになったのだ。

相川多喜男さんも五十一歳、修繕部船渠課二係勤務。船を造るのに必要な環境、たとえば排気のためのファンをつけるとか、避難標式やオイルフェンスをつけるといった環境保安がこの人の仕事である。

なぜ、分会に復帰したかという質問にたいして、二人の人たちから返ってきた言葉が、期せずして同じだった。

「それは、選挙ですたい。重工労組の推す候補者の運動をやらんばこみやるっとです。推せん の葉書をムリヤリに書かされる、票集めばさせられる、地域家庭までまきこんで、やらさるっと ですけん、逃げられんとですよ。私のごと、他の人を応援して活動すると、露骨に嫌がらせされ っとです」

どんなふうに嫌がらせされたかときくと、

「この前の地方選挙の時だったとです。私は、職場ではやらんとですが、家で私の支持する人の 応援ばしよったとです。そうしたら、ある晩、うちのまわりに、車が四台も五台もとまって、ラ イトでうちの方を照らして、イヤがらせしとっとです。女房が見つけて、みんな、三菱の人間、 重工労組の人たちだったとです。女房も口惜しがって、こげんことされてまで、がまんできんて

……」
私は、どんな人の応援をしたかを聞いた。
「私は、実は、創価学会の人間ですけん、公明党の人ば応援したとです」

2 分会にはある思想・信条の自由

——復帰した創価学会員

私は告白を聞いた瞬間、三菱は創価学会員を差別弾圧することによって、どんな得をするのだろうかという考えがひらめいたけれど、とにかく、事実を知ることが先決だった。

「学会員で副作業長の人がおっとですが、この人に作業長にするて話があったとです。そのかわり、創価学会を抜けることが条件やていわれたそうです。そんな人は、だいぶ考えて、苦しんで、最後に、学会に脱会届けば出して、作業長になられたとです。三菱の入社試験を受けてパスしてから、学会員ちゆうことがわかって、おとされた青年もおっとです」

三菱では創価学会員は入社させない、作業長にはしないということになっている事実を私も聞いた。ある新聞記者から、この三菱と同盟三菱重工労組の「創価学会員排除、民社党一党しめつけ」の結果として、大量の学会員労働者が脱会し、一頃、三菱だけで三千人いた学会員が六百人になってしまったという話もきいた。

相川さんの場合は、この前の衆議院議員選挙の時には、小宮氏の票を六十票も読んだ。

近所の知り合いをまわって、一生懸命、票読み活動をした。そのことが、いいことにつながると思つたからだ。だが、一向に職場の状態も、人間関係もよくなるらない。

「一番頭にくるとは、重工労組の委員しとる人間や一部の人間がトクすることやられとることですたい」

さかのぼると、五年前の夏、相川さんの家が台風の被害を受けた時、会社からは見舞いきたのに、重工労組は挨拶にもこず、災害補償の面倒もみてくれなかった。職場委員をしている人間は、もっと少ない被害でも、補償をちゃんともらつた。また、作業長は特定の人間にだけ、仕事をまわし、不公平なやり方が目にあまる。

「選挙で成績あげた人間は優遇されるし、組合委員をやりさえすれば、蔭で社品持出しをやっていられない加減な人間でも、出世すつとです。仕事ができませんでも、委員をやって、ゴマする人間ならよかわけですたい。仕事がどげんできる人間でも、組合の委員をせんば、偉くなれんとです。なにしろ、新しく入つた若かもんが、小宮の悪口でんいうたら、すぐ、上につつぬけですけんねえ」

ある副作業長は職場委員を兼ねていて、あることないこと、全部、係長につつぬけになることで知られている。下浦さんはその副作業長に「おれのいうことを聞かんば、先はどうなるかわかんぞ」と脅迫された。

また、下浦さんの知り合いの若い労働者が、運搬中のパイプを頭にぶつつけられ、昏倒した。

一たん治まって家に帰つたが、その夜、眼が見えなくなつてしまった。治療と精密検査のために

第三章 人間の働く職場めざして

入院することになって、作業長にそのことを相談すると、ひどい言葉が返ってきた。

「もし、公傷で届け出たら、一生うだつがあがらんようになるが、それでもよかとか」

若者はあまりのことにカッとなって抗議し、家に帰ってしまった。その夜、また、眼が見えなくなり、それから、二月近く入院療養してしまったが、公傷ではなく、私病扱いで療養をつづけた。

下浦さんは、以前にも、クレーンのフックが頭に当たって、脳障害の出た人が、公傷労災の扱いを受けず、二年間も苦しみつづけたことを知っている。労災病院の医師が三菱に交渉してくれ、本人も長崎造船所長まで、手紙を書いて、実情を訴えたが、その作業長も余計なことをしたと、怒ったのだ。その人は、あまりのことに、その場で倒れて、意識不明になってしまった。この時も、再起不能のため、退職ということに、その場で倒れて、意識不明になってしまった。この時まで、退職金と傷病手当だけですませて、やっと三百万の金を出させたけれど、三菱は最後まで、退職金と傷病手当だけですませて、労災扱いにしないようにした。そして、この間、重工労組は一貫して、会社のいう通りにしかならないといいつづけたのだ。

下浦さんはいった。

「災害の犠牲になった時、労働者が一番辛か思いをする時に、全く三菱のいうなりになるような組織を労働組合でいえるのですか」

相川さんはいった。

「停年まで後四年、同じ働くなら、ノンキに、気楽に、働いていきたかです。分会に移って、のびのびと気兼ねなしにやりたかったとです」

この人たちも、前に帰った岡田さんたちと理由は同じだった。差別されても迫害を受けても「分会でのびのびと生きたい」「人間らしく働きたい」このことが、停年を前にして、労働者が分会に復帰する共通の思いなのだ。

そして、二人とも、分会では思想信条の自由が保証されるから帰ってきたと語調を強めていった。下浦さんは創価学会員、相川さんは、シベリア帰りで、ソヴェトに恨みをもつどちらかといえば右翼的考えの持主——この二人の人が、「重工労組には、自由がない。分会では思想による差別がない」と叫んで、復帰したことの意味は決して小さくない。

下浦さんは中村分会委員長と一つの約束をかわしたという。それは「今もなお、大勢の創価学会員が重工労組に所属しているけれど、その人たちを分会に復帰させるような努力を強制するようなことはしないこと。分会復帰は、あくまで、下浦さん個人の判断と意志で行なったものであること」ということだ。

それにしても、数の上では三百五十人になった長船分会には、自由があり、一万五千人の重工労組の中では、のびのび生きられないとは、いったいどういうことなのだろうか。

私が会った重工労組の中高年齢の人たちが、ほとんど、分会の悪口をいうのをきいたことがない。中には「分会の方がどれほどいいかわかっているけど」と、はっきりいう人もいるし、そうはいわないまでも、みんな、分会に残ってやっている人たちへの親近感をもっている人が多かった。

3 気づきはじめてた「分会員のように生きる良さ」

私はいろいろな立場の人たちの話を聞きながら、三菱労働者の中で、いわず語らず、自由と人間の生き方についての一つの共通の見方、考え方ができあがりつつあることに気がついた。

つまり、三菱の中で「はっきりものを言い、まっとうに自由に生きているのは分会の人間たちであり、その自由を縛り、自由に生きる人間を迫害し差別しているのが、三菱と重工労組の幹部たちである」という見方、考え方。

誰がなんといおうと三菱と重工労組が、分会員や自由にものをいった労働者の賃金を差別し、仕事を差別し、あらゆる人権差別を今なおくり返している事実はまぎれもないことなのだ。だから、誰もが知っているのだ。三菱と重工労組が、差別と脅迫によって自由を封じこめようとしていることを。かつて徳川権力によるキリスト者弾圧の歴史をもつ長崎の人たちだから、そのことは、ごく一部の無知な若者たちを除けば、みんな気がついていることなのだ。

気がついてはいるが、自由に生きるためには、差別され、さらし者にされ、三菱の中で偉くないという状況におかれることが耐えられないと思っている人が、重工労組の大多数の人たちなのだ。

だが、今、分裂以後十年間ずうとつづいてきた。人びとの差別弾圧への恐怖心が、少しずつ変化し始めている傾向を私は感じる。一つは、今年の復帰者の人たちの考え方にあらわれている

ように、たとえ差別をうけても、会社や上役に気をつかわないで生きるの方が、ずっといいと考える傾向が強まっていること。

もう一ついえば、重工労組の中にあると二万円の差別よりもっと大きな損失をしているというふうに考え、さらには、どんなに差別したとしても、現在の分会員の人たちがやられているより以上にはできないし、もちろんクビ切りなんかは簡単にできない世の中だということも考えるようになったこと。

もう一つつけ加えると、たしかに差別はされているけれども、分会員は奥さんも働き、家も建て、上役にもペコペコせず、重工労組員より、ずっと、人間らしい生き方をしていることが知られるようになったことも重要である。

そのうえ、さらに重要なことは、ここ二、三年、分会員が団結して、三菱の差別弾圧の実態を明らかにし、憲法違反、労働法違反の違法行為を告発し、このたたかいを軸に社会的に三菱の暗黒支配を包囲するたたかいを開始したことである。犬塚事件で勝利し、復帰者への差別を不当労働行為事件として勝利し、本多配転事件にも勝ち、さらに、下請けの本多首切り事件、三十人の人権訴訟、全員の昇給昇格訴訟と、全面的なたたかいが急速に拡がっていることの影響は、一刻一刻、人びとの眼に明らかになりつつあるのだ。

三菱の不当差別をやめさせ、分会員は自由に生き、ともに働き、差別されないで三菱労働者としていく時代が、すぐ目の前にきているのだ。三菱はそうなることを、いま、もっとも恐れていることはたしかである。

だが、もうすでに、一部の人は、分会員のように生きることの良さに気がつき始めている。今度の合理化の中でも、まず、首切られたのは未組織の下請労働者であること、そして、重工組内の病弱者や年輩者や欠勤の多い者、上役に嫌われている人たちであって、分会員ではなかったということ。かつてのレッドパージのように、分会員をまず追いだすことはできない世の中であるということ。

4 緊張して疑って……作業長の悩み

ある作業長が、クビ切り同然の仕打ちで、小さな会社に向向になった時、分会員にそっと気持ちをうちあげた。

「分会の人はよかねえ。相談する仲間がおって、首にもならんし……。どげんことがあっても、分会の旗ば守ってやるのが、一番よかことばい。しっかり頑張ってな」

作業長、副作業長といっても、いろいろなのだ。必ずしも、分会員やまともな労働者を差別し、嫌がらせする人間だけではない。

私が穩密に会うことのできた数少ない作業長の一人がこんな話をしてくれた。

「そりゃもう、楽でなかですばい。安全から作業規準から、なんからなにまで、直接やらんばならんし、研修会の資料つくったり、勉強したり、若かもんは、英語までバリバリできよつとですもんねえ……休みの日も、家庭訪問ばせんばならんし、若かもんの気持をつかめちゅうのが、一



市民集会で告発する造船所——始めるひろいはたたき

番苦手ですばい。三、四年前に、若かもんがどんどん入ってきよった頃はこっちもはりきって、飲みにつれていったり、自腹切ってでん、いろいろやったもんですたい。ぼってん、近頃はあんまり、きき目もなかし、子どもの教育で金もなかし、冴えんですたい。第一、今の若かもんは、飲まして食わして、気嫌とってやってん、その時だけで、効き目がなかです。なんぼ考えとっとかさっぱり、見当がつかんです」

こう話してくれた作業長は、もう一年ちょっとで停年、出向の話がきているということだった。

また、別の副作業長の話では、仕事そっちのけで、労務管理の仕事や会議参加をすることがイヤだということだった。休みの日でも、演説会や集会の監視にいったり、誰かきていないかとチェックしたり、家を訪ねて、家族から本人の動向を聞きださなければならぬのだ。毎

第三章 人間の働く職場めざして

日、何時ごろ帰ってきますか？　どんな友だちがいますか？　どんな集まりにいきますか？　どんな本を読んでいますか？”などと。

いやだけれどもやらなければ、職制失格となるから、休みでも遊びでも、いついかなる時でも、班員のカルテをもち歩いて、刑事やスパイと同じ暮しをしなければならないのだ。

そして、重工労組の若い労働者同志の間で集まったら、お互いが信頼できず、口をつぐんでしまふように、作業長たち職制も、誰も信用できない精神状態で、日々を送らなければならない。

たとえば、浦上のある作業班でこんなことがあった。ある作業長が自分の班員を三人ずつに分けて、つぎつぎと、ミーティングをもち、ある情報を流した。そして、全班員とのミーティングを終えた後で、その作業長は、ある班員を要注意人物としてマークし、その班員の前では、すこぶる慎重にものをいうようになった。種を明かせば、その班員は、係長のスパイであったということ。作業長は、自分も知っていないようなことを係長が知っていることに疑問をもち、”係長のスパイ”を見つけたために、小さくわけたミーティングである情報を流し、誰から係長に流れたかを発見したわけなのだ。

まさに、不信と謀略の人間管理。分会員と三菱に反抗する人間を見つけたすというこのために、職制から新入社員まで、一万五千の労働者が、いつも、緊張し、疑い、常に、人の裏をかくことを考える毎日を送らなければならない。だから、ある課長は、子ども二人を残して、妻を道連れに、夫婦心中をしなければならなかったし、ある香焼工場の作業長は、極度のノイローゼで、人と話すことを恐れて入院生活を送った。

例の犬塚事件の最中にも、証言に立つはずだった、下請け関係者が、証言を前にして、自殺する事件が起きている。

三菱病院の看護婦さんの話でも、最近は、ノイローゼなど、脳神経系統の病気が大変増加しているという。不況合理化の嵐の中で、三菱労働者が大きな危機を迎えていることは確かな事実である。

IV 人間の働く職場を目指して

1 生命と安全を守るたたかい

造船現場では今日も、分会員たちの生命と安全を守るたたかいが懸命につづけられる。外業ドック、五百名の労働者の健康と今日一日の無事を願い、職場の隅々から三菱の人命軽視のやり方を追放しようと呼びかける。

村里さんが昼休み、口頭放送で、みんなに呼びかけた。

「どっくで働く、職場の皆さん！ 厳しい残暑のつづく中でのお仕事ごころう様です。

私は長船分会どっく外業安全衛生委員の村里です。長船分会は全造船機械の安全衛生統一一点検月間の一環として、本日、昼のかけりから定時まで、安全パトロールを実施致します。